

先日見たパルメニデスという人は、「存在とは何か」という問題を正面から取り上げた人なのですが、おそらく今の日本の高校生でこの人の名前を知っているのは百人もないかも知れません。「そんな知られてない人について知っても無駄やないか」と思うでしょう。

物の値段は、中学の公民でなラったと思いますが、需要と供給の関係で決まります。どんなに高価な物でも、誰も買おうとしなければ、その価格は低くなる。逆に、大勢の人が買いたいと思っているのに、製品の数が少なければ、その価格は上がる。ものが少ないゆえに価値があるのを希少価値といひます。だから、ギリシア哲学という、ほとんどの高校生が知っていない知識を持つ人は希少価値を高めるといふことにはならないでしょうか。

さて、先週見たように、ヘラクレイトスという人が「すべては変化しとる」と言ったのに対し、パルメニデスは「存在は不動、不変」だと反対した。この相反する考えを調和させるのが、アリストテレスです。でも、もしそうなら、「最初からアリストテレスを説明してくれたら、一発で全体像をつかめるとちゃうん」と疑問がわくかも知れません。言い換えれば、「何も昔の哲学の歴史なんか勉強せんでも、現代の哲学さえわかればそれで十分」ではないか、ということです。

実際、物理や化学を勉強するとき、いちいち古い時代の物理や化学の勉強をすることはありません。それは古い時代の物理や化学は、後の時代の科学者たちによってすでに克服されているからです。

哲学という学問が、我々になじみのある自然科学や人文科学(文学や歴史や地理)や社会科学(公民)と異なるところは、哲学が「存在するすべてのものを、全体的に探求する」という点にあります。(何度も同じことをしつこく言ってすみません)。存在の一面ではなく、全部を全体的に考えるのは、簡単ではありません。たとえば、ある人を見て、その人の知的な面だけを見るなら、その人の試験の成績を見るだけである程度判断できるでしょう。でも人には勉強以外にも色んな面がある。スポーツや芸術、あるいは感情や性格や習性なども。これを考えれば、人を全体的に判断しようとするのは簡単ではないことがわかるでしょう。それがあつ一人の人だけでなく、人間全体、はては存在全体を考えると、簡単には結論がでません。また、哲学の問題は数学のように明快な証明ができません。そこで、何が正しく、何が誤っているのかが、簡単には判別できないので、一歩前進、二歩後退、ということが起こるのです。

学校では、数学にせよ、理科にせよ、英語にせよ、答えのある問題を出します。でないと先生は生徒から文句を言われ、新聞でたたかれ、教育委員会から注意を受ける羽目になるかも知れません。しかし、私たちを取り巻く世界には、答えがないか、あるいは答えがあつてもひょつとしたら人類の最後の時まで証明できないような問題がたくさんあります。哲学も、すべての存在を相手にして、最も深い原因を探つていこうとするので、その種の難問が多いのです。「でも、答えがわからんような問題なら、苦労して解こうとすることはばかばかしいやんか」と思ふかも知れません。しかし、物事というのは答えを見つけることだけが大切なのではなく、その答えに至ろうとする過程(プロセス)が大切なものもあるのです。数学でも答えより解き方の方が大切であつたり、サッカーで言えば、ゴールを決めたシュートよりも、そこまでボールをつなげて行つた展開の方が大切ということがあつたりするのではないのでしょうか。何が答えかよりも、誰もが気づいていなかったところに問題を見いだすという目の付け所、そしてどのようにしてその問題を解いていこうとしたのか、などの方が第三者にとって参考になるものがあるのです。それがギリシア哲学の歴史に、またその後の哲学の歴史に見られる醍醐味なのです。

では、哲学者の努力というものは、プロセスだけで何ら有効な答えを出していないのかといふと、そう



でもありません。鋭い観察力と、分析力を備え、まじめに物事を考えていった人々は、今の我々にも役に立つ多くの考察を残しています。ただ、哲学の場合、学問としての進歩というのは一直線ではありません。それどころか、混迷や退歩も見られます。つまり、先人がせっかく深く考えて得た理論を、後輩が簡単に否定することも起こるのです。これは哲学がきわめて難しい問題を扱うから、だけではありません。では、なぜでしょうか。

この不思議な現象を説明する、ある哲学者の言葉を紹介しましょう（少々書き換えています）。「哲学の難しいところは、人間の心構えの問題がある。人は真理を発見することにはきわめて熱心であるが、いったん発見された真理を受け入れることは大いにいやがるものだ。論理的に説明されてやり込められるのは、私たちにとってうれしくないことである」(ジルソン、『理性の思想史』、76頁)からです。哲学は普通、自分より前の人たちの考えから出発して自分の考えを作り上げていくものですが、前の人が正しいことを言っている、それを全面的に受け入れるのは自尊心が許さないという場合があるのです。

ここにもう一つの哲学の特徴があります。それは、哲学は世界観や人間観を生み出すという点です。この点で哲学は、宗教や思想と似ています。(だから、哲学や思想や宗教は注意して学ばねばなりません。変な考えにはまると、とんでもないことをする可能性があるからです)。それに対して、たとえば数学なら、ピタゴラスの定理を知ったからといって、「明日から毎日家の前の道を掃除しよう」というような決心は生まれてこない。しかし、哲学では、たとえば「人とは生きようとする利己的な意志なのだ。しかし、この意志があるから、人は不幸せになっとなる。ゆえに幸せになりたければ生きる意志を捨てねばならんのじゃ」というような考えを受け入れれば、その人は生きることには何の喜びも感じないようになって不思議ではありません。

1970年前後にさかんにテロ行為をした連合赤軍の若者たちは、「人類の歴史は階級闘争を繰り返すことによって進歩し、最終的には階級の無い地上の楽園ができる。だから、我々のすべきことは革命運動に参加し、資本家とその仲間である政府をぶっつぶすことだ」という考えを大学の先生たちから吹き込まれて、それを信じて行動したのです。

ともかく、哲学が人の人生観や世界観に大きく関わり合いを持つと言うことは、逆に言うと、その人がどのような人であるかで、哲学的な考えも変わってくるということです。「大切なのは真理を発見すること。そのために私が生き、また死ななければならぬような理念を見ることである」(キルケゴール)と考えている人と、「自分はなにかと恵まれてへんのに、世の中には運のええ奴がようさんある。あの楽しそうな顔をしている奴らに仕返ししてやる」と思っている人では、受け入れる哲学は違ってくるはずでしょう。



ですから、繰り返しますが、哲学は薬と同じで、「なんでもいい」わけではなく、一人一人の考えに、眉につばして見ていかないとはいけません(これを批判的な態度という)。この授業では、各哲学者の主張のどこまで真理に近づいたのか、どこで誤ったのかを考えながら紹介できればと思っています。

(絵。上。パルメニデス：下、ヘラクレイトス)